人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌　24 (1)　91 － 97　2024

Digital Transformation(DX) を用いた授業の学修効果

―障がいを持ち地域で暮らすことへの理解と支援に関する授業をとおして―

加利川　真理 [*1]　沖西　紀代子 [*1]　安田　千香 [*2]　岡田　ゆみ [*1]

*1　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース
*2　日本赤十字広島看護大学看護学部

抄　録

本学看護学コースでは，「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる人材育成事業」（2021 年度大学改革推進等補助金）の交付を受け，Digital Transformation（以下 DX とする）を看護基礎教育に導入した。そこで，2021 年度に新カリキュラムで創設された「地域看護対象論Ⅰ」の科目で，「地域で暮らす障がい者の生活の実際の理解と支援の在り方」を考えることを目的として，DX を活用した授業を展開したため，その授業内容と学生の授業効果について紹介する。

キーワード：DX，地域，生活，障がい者，学修効果

1．緒言

新型コロナウイルス感染症の拡大防止を目的とし，多くの看護系大学では臨時休校を余儀なくされ，ICT を活用した遠隔・オンライン授業への取り組みが実施された[1)]。

本学においても，感染拡大防止の観点と学生への教育の社会的役割を継続するため遠隔授業を導入し，ICT 技術を活用した看護教育を進めてきた。その中で，看護学コースでは，「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる人材育成事業」（令和 3 年度大学改革推進等補助金）の交付を受け，DX を看護基礎教育に導入した。

本学看護学コースでは，2021 年度に新カリキュラムが施行され，新たに「地域看護対象論Ⅰ」の科目が創設された。この科目は，地域の生活環境とそこで暮らす人々の健康と支援の在り方について考えることを目標とした，1 年次生対象の必修科目である。この科目の中で，「障がいを持ち地域で暮らし続けることの理解と支援の在り方」について授業を展開した。授業では，地域で暮らす障がい者の生活の実際について，24 時間の介助を必要としながら，社会資源を利用し，20 年以上一人暮らしをしている筋ジストロフィーの疾患を持つ A 氏とその母親に協力を依頼し，その方の生活について動画撮影とインタビューを実施した。授業では，対象者の理解と支援の在り方について考えることをねらいとし，撮影した動画の視聴と，A 氏とのオンライン上での対話を行った。また，この効果を測るために，授業前後で障がい者との関わり方についての質問紙調査と看護職に求められる態度・知識・姿勢についてグループ討議を行ったため，それについて報告する。

2．授業の概要

2.1　学修目標

この授業の学修目標は以下の 3 点とした。

①治療方法が確立していない筋ジストロフィーの疾患を持つ A 氏の現在の生活について理解できる

② A 氏と家族について，これまでの状況や取り巻く環境について理解できる

③ A 氏と家族の在宅での生活上の課題や，支援の在り方を検討することができる

2.2　授業科目の位置づけ

地域看護対象論Ⅰは，看護学コース 1 年次生（60 名）を対象に 1 単位 30 時間で開講している。そのうち，「障害を持ち地域で暮らし続けることの理解と支援の在り方」の授業は 3 コマで実施した。

2.3　学修の流れ

学修の流れは，2.1 にあげた学修目標に沿って設定した。ICT モデルを基盤に，在宅で暮らす多様なニーズを持った人々の「健康」について，心身の状態，活動，参加といった生活機能全体を捉えること，それには個人因子と環境因子が相互に作用していることを理解する流れとした。今回の授業では，A 氏の日常生活の様子やそれに対する考えや思いを知る過程で，A 氏にとっての「健康」を捉えていった。また，授業中にいくつかの課題を提示し，その課題解決に向けてグループ討議を取り入れ，学生が主体的に，地域で暮らす対象者への看護職としての関わり方について検討していった。

2.4　授業形態と内容

授業形態と実施内容を表 1 に示す。

表 1　授業形態と実施内容

コマ数	概要
1 コマ目	【疾患や理論モデルに関する理解】 ・ICF・疫学・病態・症状等についての知識に関するオンライン講義[*1] 【対象者の理解】 ・A 氏の手記を読んでの感想の共有 ・A 氏へのインタビュー動画[*2]（11 分）を視聴し，事例に関するグループ討議の実施 各グループの討議内容の共有[*3]
2 コマ目	・A 氏の 1 週間の生活スケジュールについての説明 ・A 氏の日常生活の動画視聴（自宅での様子・作業所での PC 動作・絵画作成の様子）[*4] ・A 氏の母親へのインタビューの動画（9 分）視聴[*5] 上記の動画を視聴し，事例に関するグループ討議の実施
3 コマ目	・2 コマ目の各グループの討議内容の共有[*6] 各グループでの討議内容に関して，A 氏とオンライン上での対話[*7]

筋ジストロフィーの疾患理解を促すため，学生に事前課題を課した。また，A 氏の理解を促すため，過去に A 氏が記した手記について学生が感想を共有することを組み込んだ。

*1 オンライン講義では，在宅での看護の提供が広がる背景，ICF の概念，難病（筋ジストロフィー）の疾患と治療の理解について事前課題を補足した。

*2 筋ジストロフィーを持つ A 氏に対し，事前にインタビューを実施し，その動画視聴を行った。インタビューの内容は以下の 4 点について尋ねた。
- 日常生活に関する思いや考え，楽しいと思うこと，嬉しかったこと
- 日常生活を送るうえで工夫していること，体調管理について意識していること
- 趣味の取り組みについての考え
- 他者との交流についての考え

*3 A 氏の手記とインタビュー動画の視聴をもとに，A 氏に対して捉えたことや感じたことについて , 各自でまとめ，その後，グループ討議により共有した。

*4 ICF の概念を用いて A 氏の健康について学生が考えられよう，A 氏が日頃活動している作業所で，視線入力を活用した PC 作業の様子や，介護士が A 氏の指を支えながら共同作業で絵画を作成している様子，自宅で介護士にマウスの位置をセッティングしてもらい，インターネットを使用している様子など撮影した動画を視聴した。

*5 A 氏の母親へのインタビュー動画を視聴した。インタビューは以下の 3 点について尋ねた。
- A 氏の活動を支援されてきた思い
- A 氏の活動に，どのように支援していこうと思っているか
- 看護師や介護士などの専門職に対して感じていること

*6 動画の視聴を終え，学生間で看護職に求められる態度・知識・姿勢について各自でまとめた後にグループ討議により共有した。

*7 オンライン上で，A 氏の自宅と教室を繋ぎ，学生がグループ討議で共有した内容を聞いてもらった。また，2 コマ目終了時に，学生から寄せられた質問に対し，A 氏がオンライン上で回答し，学生と A 氏との対話をはかった。

3．授業に参加した学生の反応

授業の前後で，学生に任意のアンケートを実施し，59 名から回答を得た（回答率 98.3％）。

アンケート実施の際には，論文化しデータを公表することについて説明し, 同意した学生のみ回答を得た。なお，アンケートは，県立広島大学研究倫理審査委員会の承認を得て，実施した。

3.1　アンケート項目の設定

授業では，地域で暮らす筋ジストロフィーの疾患を持つ A 氏の生活や健康の理解を深めるために，A 氏とその家族の健康や生活の状況，社会活動や周囲との関わりを，視聴覚教材や当事者とのオンライン上で接触する機会を設け，その上で支援者としての関わりを考える機会をもった。このことから，「授業を受けた学生は，A 氏と家族の生活や健康をより具体的に理解できることで，授業を受ける前よりも，障がいをもつ人々への関わりの意識が変化する」と考え，アンケート項目の選定を行った。そして, 尺度開発者の承諾を得て「児童生徒版障がい者に対する多次元的態度尺度[2)]」のうち，【積極的対人関係】【自発的交流意識】の下位 2 因子 6 項目を質問項目として設定した。回答は，「とても思う」「思う」「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」の 5 件法で求めた。その結果を，図 1 ～ 6 に示す。

質問 1　障害のある人と抵抗なく話すことが出来ると思う。
質問 2　障害のある人にも気軽に声をかけられると思う。
質問 3　障害のある人に対して変な遠慮がないと思う。
質問 4　障害のある人が困っているとき，迷わず援助できると思う。
質問 5　障害のある人と一緒に仕事をしてみたいと思う。
質問 6　障害のある人と積極的に交流したいと思う。

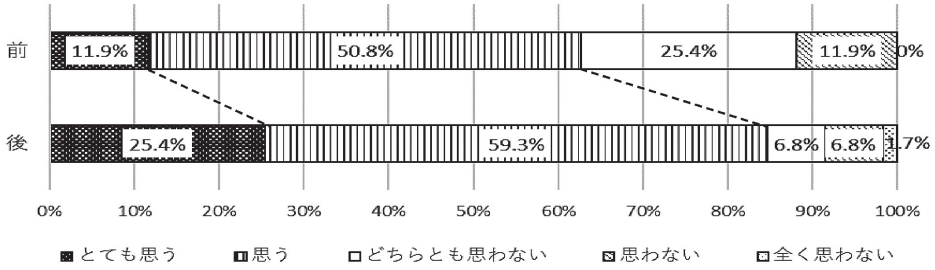

図 1「障害のある人と抵抗なく話すことが出来ると思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

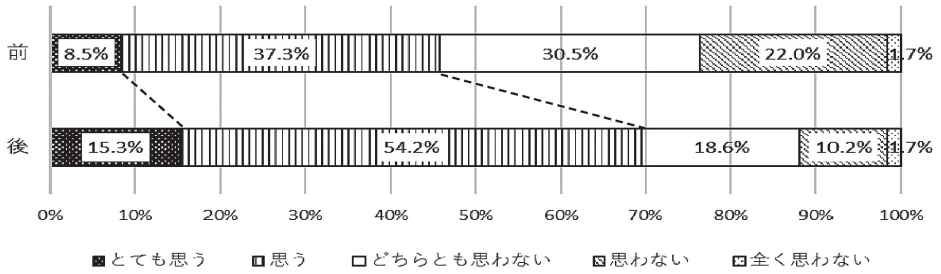

図 2「障害のある人にも気軽に声をかけられると思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

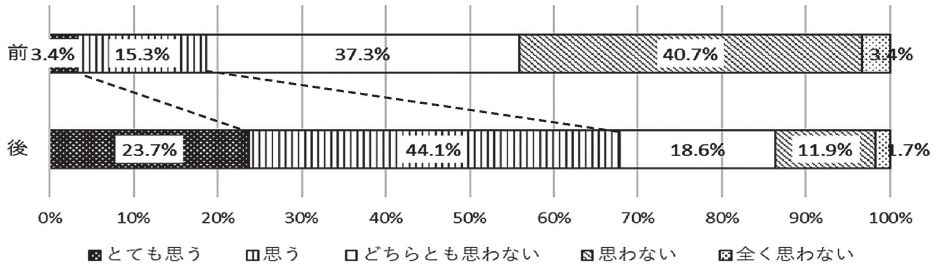

図 3「障害のある人に対して変な遠慮がないと思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

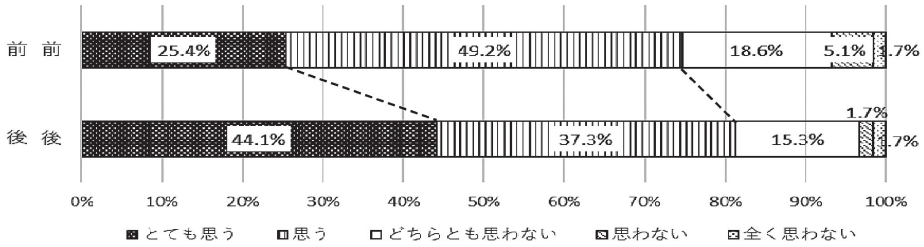

図 4「障害のある人が困っているとき，迷わず援助できると思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

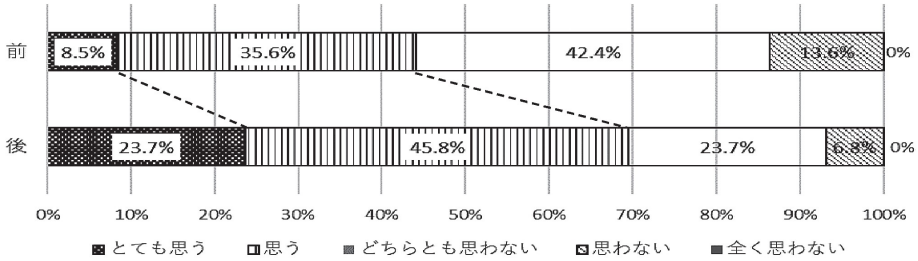

図 5「障害のある人と一緒に仕事をしてみたいと思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

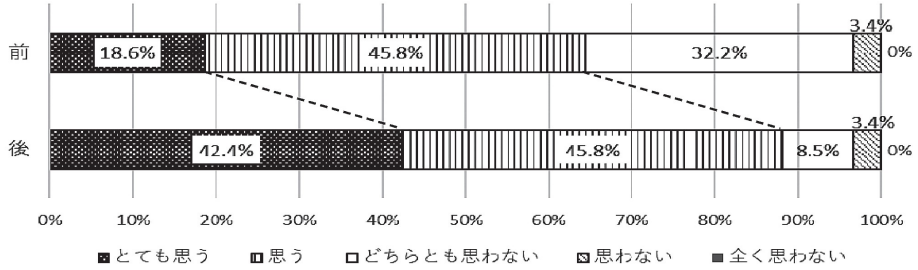

図 6「障害のある人と積極的に交流したいと思う」の授業前後の回答割合（n ＝ 59）

3.2【積極的対人関係】【自発的交流意識】に関する授業前後の比較

該当する 6 項目すべてにおいて，授業前に比べ授業後が，「とても思う」「思う」の項目の割合が高くなっていた。

3.2.1　質問 1　障害のある人と抵抗なく話すことが出来ると思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 37 名（62.7%）に対し, 授業後は, 50 名 (84.7%) に増加した。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，9 名 (15.3%) であった。

3.2.2　質問 2　障害のある人にも気軽に声をかけられると思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 27 名（45.8%）に対し, 授業後は, 41 名（69.5%）に増加した。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，18 名 (30.5%) であった。

3.2.3　質問 3　障害のある人に対して変な遠慮がないと思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 11 名 (18.7%) に対し, 授業後は, 40 名 (67.8%) に増加した。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，19 名 (32.2%) であった。

3.2.4　質問 4　障害のある人が困っているとき，迷わず援助できると思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 44 名 (74.6%) に対し，授業後は，48 名 (81.4%) を占めた。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，11 名 (18.7%) であった。

3.2.5　質問 5　障害のある人と一緒に仕事をしてみたいと思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 26 名 (44.1%) に対し, 授業後は, 41 名 (69.5%) に増加した。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，18 名 (30.5%) であった。

3.2.6　質問 6　障害のある人と積極的に交流したいと思う

授業前は，「とても思う」「思う」が 59 名中 38 名 (64.4%) に対し, 授業後は, 52 名 (88.2%) に増加した。また，授業後「どちらとも思わない」「思わない」「全く思わない」は，7 名 (11.9%) であった。

3.3　グループ討議の内容

動画 [*2*9] を視聴し, A 氏の「健康」や, 生活の様子（工夫や意欲的に取り組んでいること，周囲の支え，意思決定，自分の役割，大切にしていること）についてグループで話し合ったうえで, 看護職に求められる態度・知識・姿勢についてグループ討議を行った。今回はその内容の一部を抜粋し，紹介する。

【看護職に求められる姿勢】
- 「相手のことを知ろうとする姿勢」「対象者の本質を知ろうと努力する」
- 「相手の気持ちを汲み取る」「相手の思いや考えを尊重する」「積極的に相手を肯定して受け止める」

【看護職に求められる態度】
- 「平等に接する姿勢」「障がい者だからと差別しない」
- 「コミュニケーションを活発にとる」「コミュニケーションが難しい場合でも，PC を使うなど工夫して根気強くコミュニケーションをとる」
- 「過度な支援をしない」「できないところは補い，できるところは活かす」

【看護職に求められる知識】
- 「対象者の症状を知る」「医療的な知識」「状況に合わせた対応ができる幅広い知識を持つ」
- 「対象者の趣味にも対応できるような知識」
- 「地域の環境について知る」「対象者が住んでいる地域の医療資源の把握をする」「地域にどのような障がいを持っている方がいるか知る」

4．考察

昨今のようなアフターコロナ下でも看護教育において DX を用いることで，今回のように重度の障がいを持った対象者とのオンライン上での交流が可能となり，低学年のうちから，対象者の日常生活の様子を知ることや，対象者との対話を通して，様々な疾患や障がいを持った対象者の理解や支援方法を考えることができると考える。

今回のアンケート結果から，特に質問 3「障害のある人に対して変な遠慮がないと思う」の項目で，授業前と比べて授業後に「とても思う」「思う」と回答した学生が顕著に増加したことがわかる。グループ討議からも【看護職に求められる態度】として，「障がい者だからと差別しない」「平等に接する姿勢」といった内容があがっているように，障がいの有無に関わらず，対等に接することの重要性を学んでいた。障がい者との直接的相互作用は，対象となる人やその集団に対する態度を変容させやすい [3)]。学生が，動画を視聴し，A 氏が趣味に没頭している姿や，作業所の仲間やスタッフと交流している姿，オンラインでの対話を通して，自身の生き方を自己決定し，果敢にやりたい事に取り組んでいる姿を目の当たりにしたことで，対象者をより理解したからこそ，上記の内容を実感したと考える。

質問 6「障害のある人と積極的に交流したいと思う」の項目においては，授業前から「とても思う」「思う」と回答した者は，全体の約 6 割だったのに対し，授業後は，8 割を超えていた。グループ討議から，看護職に求められる知識として，対象者の症状や医療的な知

識，状況に合わせた対応ができる幅広い知識のみならず，対象者の趣味にも対応できるような知識をあげていた。また，地域の環境について知ることや，対象者の住んでいる地域の医療資源の把握をすることが，看護師として求められている知識であるとあげていた。このように，看護職として対象の疾患や医療について学んでいくと同時に，対象者の大切にしていることや考えについて理解することや，対象者が住んでいる生活環境や地域を知るといった幅広い視点を持つことの重要性に気づくことができたと考える。そのような幅広い視点を持って，対象者への介入方法を考えていくことが地域の看護職として求められる能力であるといった理解に繋がり，これらは，今回の授業の成果であったと考える。

参考文献

1)　菅原尚美他．コロナ禍における遠隔授業を導入した演習・実習科目の教員の振り返りと看護学生の受け止め．研究紀要青葉　Seiyo 第 13 巻第 1 号．p.7-23，2021
2)　楠敬太，金森裕治，今枝史雄．障害理解教育の評価に関する研究－児童生徒版障がい者に対する多次元的態度尺度の開発を通して―．大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門　第 61 巻　第 1 号．p.59-66，2012
3)　山内隆久 . 偏見解消の心理－対人接触による障害者の理解 . ナカニシヤ出版，京都，2000

Humanity and Science　Journal of the Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima　24 (1)　91 − 97　2024

Learning outcomes of classes using digital transformation (DX)

— Effects of classes on understanding and supporting people with disabilities living in the community —

Mari KARIKAWA[*1]　Kiyoko OKINISHI[*1]　Chika YASUDA[*2]　Yumi OKADA[*1]

*1　Nursing Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
*2　Faculty of Nursing, The Japanese Red Cross Hiroshima College of Narsing

Abstract

In our nursing course, digital transformation (DX) was introduced in basic nursing education in response to the grant,“Human resource development project capable of responding to new medical care in the era of COVID-19” (2021 subsidy for the promotion of university reform). Therefore, in the “Community Nursing Theory I” course that was developed as part of the new curriculum in 2021, we introduced a class using DX with the objective of “effectively understanding the lives of people with disabilities living in the community and ways to support them.” In this study, we discuss the contents of this class and its effect on students.

Key words: DX, community, life, people with disabilities, learning effect